

訳読教授法に基づいた教養英語は帰るべき目的になるか

著者名(日)	山田 豪
雑誌名	東京都立産業技術高等専門学校研究紀要
巻	3
ページ	93-105
発行年	2009-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1282/00000074/

訳読教授法に基づいた教養英語は帰るべき目的になるか

山 田 豪

The Grammar-Translation Method or Oral Training

Tsuyoshi Yamada

The purpose of this study is to recognize that rather than the grammar-translation method, oral training is the basic key to good comprehension of English, because understanding through listening and speaking can fully evade any interruption from Japanese words. When we learn English through grammar-translation, English words are wholly colored, or transformed by the influence of Japanese words, or the genuine meaning of the English sentences is hidden. So Japanese learners can't clearly grasp the basic meaning of English. Also, Japanese human feelings can never be re-constructed exactly in English.

はじめに

「小学校英語」の実施を機に、その是非論を含め、どういう教え方が取られるべきかで各種の熱い議論がなされている。この対立は、英語教育が将来的にどの方向に向かうのかを決めていく上で不可欠な議論になるであろう。この小論では、訳読教授法が持つ特質を掘み、これに基づく教養英語についていかに扱うべきか考察してみた。言い換えると、訳読中心の教授法は和語に支えられ解釈されて機能することが多いが、果たしてそれで<生の英語>を学んでいることになるのであろうか、と問う主旨を持つものでもある。

本論

I 価値の相対化に基づいた世界観(人間と社会)の確立

英語と日本語の言語としての差が大きいことは、斉藤兆史(2003)が指摘しているだけでなく、W・ヴォリンゲルの『抽象と感情移入』(1953)や、本多勝一の『アラビア遊牧民』(1972)からも導き出すことができる。

和語と英語との間の距離が大きい。およそ相反する関係にあると見られることから言えば、和語とその他の外国語の距離のそれぞれの遠さにも無関心にならないことであろう。言語が違うことで、それぞれの民族が私たち日本人とは隔たった軸に立たされて、それぞれ違った世界観に従って生活史をつくっていることを覚えていたいものである。

小川芳男(1964)は、この距離の遠さについての認識をどれだけ持っていたかは分からないが、彼の次の指摘は、この差に基づく世界観の相違を見事に示している。

英語教育はそれによってアングロ・サクソンの思考形式を習得することである。言

語と思考とは不可分である。従って新しい言語を習得することは新しい思考形式を獲得することである。従来日本語を使用する社会の中で、日本的な思考の形式を身につけた人が、英語を学習することは、単眼を複眼にし、一次元の世界から二次元の世界へ出ることである。閉じられた世界から開かれた世界の進出であり、心の革命である。

以上の認識に立って、日本人における人間を自立的、開放的に育むべく、いかなる英語教育を実施すべきかについては、どのような目的を持ってなされるかがその成否を左右することになる。言い換えれば、それには次の2項目の展望を持つことが基本になる。

A 近未来においてどういう人間をつくっていくのか、そして、10年後、50年後において、どのような社会をつくっていくのか。

このテーマについては、日本に生活する庶民が、東南アジアを含む、世界の各地域に生きる、目には見えにくい諸民族・庶民の存在をいかに意識するかに関わっている。彼らとの共生・連帯を基本にした生活ができるか否かである。実際には何もできないのであるがしかし、意識の上でもその方向の基本性を確認できれば、異国に住む人の息吹を感じ、彼らとの共感を求めようと、それに適した言葉を学ぶように庶民を活気づかせることになる。必然的にそれに合致した言語(母語・外国語)教育が必須になる。

この主旨を確実にする言葉には次の指針が必要となる。

B どのような見知らぬ人にも対等の人間として向き合い、己の在り方を説明できる、言語(母語と外国語)を持ち、それを適正に進める教育を開発できるかどうかである。

1 国家意識に基づく母語とされる国語教育を見直して

どの言葉もまずは庶民のものである。日本でもしかし、多くの場合権力がこれを取り上げ、庶民の言葉を消し去り、それが権力のものであるかのように、脚色し押しつけ、庶民をその用兵として扱う巨大な言語「国語」が幅を利かせている現実にある。その故にこそ、これを庶民の側に立って、相対化でき、これに振り回されない批判精神を持つことであろう。そしてこの批判精神の下に庶民本来の言葉が指定する視座を設定し、ここに立つことを一つの基本とすることである。また、この世には計り知れない現実には追い込まれ、厳しい生活を強いられた人たちが数知れず生み出されている。このことを知れば、彼らが持つ怒りの深みにまで降り、せめて意識の上で少しでも彼らと共生しようとする気持ちが高まるものである。そうであれば、自民族の言葉のうちに引き留めようとする強い枷をも根本的に突き破って、新たに私たちの人生への視座をつくりあげなくてはならないであろう。この視座を私たちが立つべき根底的なこととして覚えることであろう。しかしこの意識がなく、権力の言葉に取り込まれたままに、いかにその言葉教育への賛成・反対論が戦わされ、それについての改善論などが多く出されても、それは各論的な扱いにしかならないであろう。

言い換えるならば、庶民のものである言葉に根ざすだけではなく、さらにこれを突き抜け、新たな視座を設定することで、内に閉じこもり、内輪の人たちは大切にすが、部外者た

ちとはまともに付き合わないというような、従来の姿勢を許さないことである。そのためには、先ず第一に、「わたし」と「あなた」がはっきりしない国語において、この一人称と二人称とが対立する関係にあることを常に喚起させ得る母語・日本語を開拓することである。これがまた、日本語で話そうとするどのような見知らぬ人たちにも通ずる日本語へと変革することでもある。同時に、日本文化が歴史的に育ててきた言葉には極めて問題点もあるが、これを話すが故に日本人である、という言葉でもあることから、この言葉にも敏感な人間をつくり上げることである。この意味で今後については、二本立ての母語教育を確実にしていく必要がある。

2 子どもを選別の垣根に陥らせない英語教育を求めて

高橋源次(1964)は、次のように述べ、英語教育が選別主義から程遠くあるべきものであることを指摘している。

およそ英語教育には、世界文化の摂取、それに対する貢献のほかに、日本文化に対する自覚、思考の訓練、人格の完成などの諸問題を含む人間教育、すなわち、英語による人間教育の大本がある。教育という以上、人間をつくることが究極の目的であるからである。今日は特に国際的視野をもつ人間像が求められている。

この高橋の指摘を待つまでもなく、今後は、均一的なスキルの開発や知能の向上を目指してすべての生徒に同じ知識を与え、それで以て選別の枠を置く学習ではなく、学習者の人間を経由し、それぞれの学習者による選択に基づいて、その人生に求めたい思考能力や判断能力の向上と充実をはかるための知識を供し、学習をすすめることを原則とすることであろう。人間のあり様を開拓して、十分な思考力を持った自立的な精神を育むことが基本であって、そのことを助ける英語教育であることが最大限求められることになるだろう。

それには、学ぶ者の人間を閉鎖性の内に留めたり、内向きであることを美德としてきた価値観に振り回されないことである。つまり例えば日本語では、「お父さん、これあなたのネクタイ?」など、目上の人に対して所有格は用いないが、英語では人称代名詞を用いて、人間に出会う意識を基本にすることを植えつけている。このように、和語世界とは違った異質な英語が持つそれ自体の世界を見せてくれる英語教育を展開することである。

a 訳読中心の教授法の見直し

日本の漢語受容の仕方において、山田孝雄はその著『国語学史』(宝文館、p.54, 1943)において、三種類のあり様を考えている。一つは、漢語が国語を支配している場合、もう一つは逆に、国語が漢語を支配している場合、そして三番目は、お互いに妥協して両方が表現される場合である。これを英語と和語との関係に置き換えると、やはり三種類の分類になろう。英語が一貫してその主張が保障されるのは一つの場合のみである。後の二つでは、

英語は和語にほぼ浸食されている。これでは和語に英語が抱え込まれ、両者の距離が消され、英語の世界観が人間を突き通す力を持つことがないのである。

人間を自立的につくり上げ、他の国々の庶民と意思をともにできるようになる英語教育であるには、第一に英語が和語の操作から自由であることである。そうでなくては、日本人における頑固な閉鎖性が打破され得ないし、また英語を話している庶民に求められる精神の中身や、それを貫く軸の輪郭が見えて来ることはない。つまり、和語に抱え込まれた英語では、英語の言葉自体がほとんど全面的にその場の雰囲気や効率主義に羽交い絞めにされてしか働かないのである。そのため、どうしても思想的な結実・確立が妨げられる結果となる。思想的に右か、左か、というような立場を保障する形で英語が働くのではなく、その場のご都合に合わせた英語になるのが当たり前という現実になっている、つまり、いつも効率性に基づいた英語へと無意識に収斂していく。このため、哲学的、思想的な確立へというように、効率性以外の在り方へと進展する英語の余地を主張する隙間がなくなっているのである。その点では、英語教育は、根本的に和語の働きや他の抑圧を超えて自らの在り方を創作する<人間開放学習法>でなくてはならないであろう。

しかしまた英語については、津田幸男が「英語は権力の言語である」と主張し続けている。このように英語には、権力の側に立つ英語という性格が深く塗りこめられている。

この勢力をいかに抑えていくかであるが、実際この英語を回避することはできないであろう。しかし他面では英語は何よりも庶民の言葉である。英語のこの次元に食い込むことで、絶えず権力の言語を告発し、抑制し続けるしか手はないであろう。この意味でも訳読式に留まるのではなく、それぞれの世界の、あるべき全体像を想像的に描き出し、そこから現実をつかみ直す行為である<人間開放学習法>によって人間を権力からも開放する観点を明確にしていくべきであろう。

それでは、権力主義について、大谷泰照(2007)はどのように考えているのであろうか。彼は、その著書に「同時にこのことは、日米経済戦争の『敗戦』によって、われわれはまたもや、飽きることもなく、明治以来第4回目の『親英』『反英』の新しいサイクルに足を踏み入れようとしていることを意味する。しかし、われわれの間には、そんな自覚は、この期に及んでなお、ほとんどみられない」(『日本人にとって英語とは何か』p.98)と述べている。しかし、ここで取り上げた効率主義と権力主義に塗れたままでいれば、流れがどちらに向かっても構わないことになる。外国語の在り方についてだけではないが、他の諸国の人たちと共存しなくてはやっていけない日本の庶民である。そういう庶民であれば、原則的にその人間を開放することを求められていて、自らの開放という認識の下にその方向を厳しく問わなくてはならないであろう。しかしそのことに無関心であれば、外国語教育に対する望ましい変革への糸口を見出すことはできないであろう。

つまりは、同時に効率主義と権力主義との二つの立場を肯定しながら、その同じ次元においてこの二つに塗れた英語教育に対する賛成・反対論を述べても、ほとんど不毛であり、

英語教育の進展はこれまでと同様に、今後も見られないことになるだろう。それでも歴史的に英語教育への反対・賛成論が、権力にとっての英語教育の是非というような低次元で議論が繰り返されてきている現実がある。その議論が成立する大きな根拠は、国家への貢献がテーマであって、それに値するか否かに関わる貢献論が分かれ目としてあるからでもある。

「英語教育は文化的教養でありたい」と主張する福原麟太郎(1948)は、その『英語教育論』で次のように述べている。

一體結論としていへば、外国語教育といふのは所詮、人間の心の中から、國語教育だけでは、與えられない知見、引き出せない可能性を引き出し、日本の外にあるものをつかまへさせて、それで國家のお役に立たうといふのであります。

このように指摘し、その後で「国家のお役に立つ」ことに結びつけている。しかしこれでは原則的に権力主義を相対化することはできないであろう。

これからの英語教育ではこの故に、先ず庶民における人間個々の変革を主要なテーマとして設定することである。庶民においてと言っても、他の外国語も積極的に学んでいく必要があるため、英語教育でもすべての大人のうちで希望する人たちと、希望する子どもにおける人間変革が大切になる。ここでは、**listening, speaking, reading, writing** という4本柱それぞれからの力を1つに集中し、それを学習者の身体を刻むことで、人間変革の手づるにしていくべきであろう。

福原はまた「一般教養のための英語」であるとして次のように説明している。

みな、いわば、一般教養のためである。一般教養のために英語を学ぶのである。それは楽しく、ためになるものでなければならない。それは文化的な知識であり、芸能であり、人の心を豊かに培うものであるべきである。学校英語と実用英語とは自ずから異なる道を取る。

しかし文化的な知識を有効に伝えるにも、土台となるのは先ずは海外の人たちの生き方と同様の観点を共有できるように、その人間を変革し、共生するプロセスを基本にすることである。それができて初めて、伝え難いものを異民族の人たちへある程度正確に伝えることができるものである。

この意味では、4本柱のうちでは少なくとも、**listening** と **speaking** を基本にすることである。そして **listening** と **speaking** の理解とともに容易ではないが、できる限りこのチャンネルで **reading** と伴に **writing** をも行うことが基本である。いわゆる直読直解を心がけることである。この点では、英語において、その人間を自立的に創作しようとする際には、和語に縛られた訳読中心の教授法から決然として一線を画すことであろう。訳読中心の教授法では、いつまでも日本的な心性から抜け出すことは不可能だからである。

b listening と speaking から導入し、そしてこのチャンネルから外れないところに reading と writing を設定する教え方

listening と speaking 作業に集中し、一つには英語を話す人たちの思いに倣いつつこれを繰り返すことで、英語表現の特徴や癖をつかむことである。そして、これが指定する軸に学習者の思考の軸も設定し、ここに立って一貫した判断力を持つことができるように心掛けることである。また、日本語を使った英文解釈による理解にはかなりの時間を使うが、これを補助的なものとして扱う方がいい。その場合も listening と speaking の関係が提示する在り方に基づいて想像的に向かい、英語の発想(listening と speaking のチャンネルが持つ在り方)をどこまでも消さないように配慮することであろう。

子どもにおける人間において、それぞれの価値観に基づいた人生観を描き出し得るものとして英語教育を位置づけ、その基礎の部分で学校で実施するべきである。

次に見るが、中島文雄も英語を教養と実用というように二種類に分けて考えてはいない。

私は教養英語と実用英語の区別を認めないものであり、基礎的な英語教育は英語の訓練を主とすべきものであると考える。

斎藤兆史(2007)はしかし「学校教育で与えるべきは、そのまま実用に供する低級な会話能力ではなく」と主張して憚らない。具体的な目の前の外国人に配慮することで、実際に言葉が生かされることを知れば、そこにも reading の力が大切なことは言うまでもないが、実際には listening と speaking の習得があつて初めて、人間関係が進むのである。また、人間として未知な人へと橋かけていくにはそれを確実にする言葉が不可欠で、他者へと橋かけることが自己を開放していく第一歩であるはずである。これができなくて、いかに訳読法に長けても、それが、日本文化に抱え込まれ、そこから外の世界へ出られないものであれば、これからの人間としては不足ではなかろうか。少なくとも人間の精神をつくる上で支柱になり得る会話能力を低級だと言い放つとは、教師としてはあまりな発言である。

また、日本にいる他の国の人たちと対する時は、公的に仕事をすませるだけでなく、それ以上に私的な付き合いが可能になれば、彼らが置かれた現実などにも関心を持ち、その面での共生へと自らの生き方の幅を深めていくことができる。

そのための前提づくりとしては、CDなどを聞き、その音声やリズムが与えるイメージ、感情や思いなどを体感して、それを共有しようとするものである。最初のうちは、意味はほとんど分らないものであり、余程やっても半分程度しか分らないものである。それでも、可能な場合は唇と舌を動かし、意識的に耳を傾けて、音声などから受ける感覚を身体に刻印することである。この自分の身体への打ち込みを確実にしていく中で、いろんな英語表現を通した意識を自らの努力で立ち上げようとするのであろう。

しかし、生活全般に必要な各種の英語表現を自分の身体の中に受肉させ、それを目の

前の出来事へと意識的に絡めて立ち上げるといっても、その作業は実際容易なことではない。母語においてすら実際にそれがなされていないのである。和語は極めて状況依存的であって、状況がつねに主人で、その都合によってしか物事が動かない性格を持っている。つまり、母語においても、自己の責任において喫緊なことを引き受けようとする言語基本的な言葉行為が許されていない現実である。このことは、日本人の間では自己の在り方を主体的に引き受けるべく、意味のある結論を引き出そうとする対話が見られず、不毛であることから理解できる。対話が日本語における主人公になれないのである。お互いの真摯な意見を交換する対話が稀であるとは、人は向かい合う相手に人間として出会おうという姿勢が丸っきりないことを示している。それは即ち日本人の多くは自分という人間にも向き合って生きていないことを露わにしていることである。このことにも、敗戦後ずっと日本人が人間として劣化し壊れ続けている直接的な原因がある。

しかしながら取りあえずは、生活のいろんな局面に必要な英語表現を定着させ、それを必要に応じて意識的に立ち上げられるようになることが、表面的には英語の能力を習得したことではあり得る。このレベルでもいろんな対応を英語ですませることができるはずである。原則論的にはしかし、道具でしかないと思われている英語という外国語を、日頃甘えてしか生活していない自分のうちに定着させ、それでいて、英語の各種の表現をテコに自らの意識を英語的につくり上げようとすることはとても困難なことである。端的に言えば、日本人におけるバイリンガルの実現は表面的に流れやすいということである。それは、和語が日本人の人間に極めて比重の高いものとして受容されているが故に、概念を主人公にした言葉を排除する傾向が強いからであろう。

しかしそれでも、ここに述べた作業を通して、英語を話す生活者の思いやイメージはどうなのかと思ひ遣り、そして想像して進めれば、音声自体の美しさを実感できるだけではなく、音声が持つ味わいへと親しく接近することができるものである。そのような思いを持って日々自己訓練していくことである。

Ⅱ 従来取られてきた言語政策の克服

国家から庶民が下に見下されて、そこで庶民はそのための「何者か」であればいいという発想がほぼすべてとされてきた。この意味では、国家主義的な言語政策の反省が今後根本的に必要であろう。

A 一元的な統制と均一化された言語からの自由

国家政策として政府は、母語を日本語の観点から教えるのではなく、国語の範囲を設定し、その枠を抜け出て教えることを許さないという姿勢を崩していない。このことは、『「国語」の近代史』（2006）における安田敏朗の指摘から見ても明瞭である。同様に、英語の中身に対しても敗戦後については、告示小・中学校学習指導要領(1958)と検定制度の発表(1947)で、その中身が国家的に決定され、生の英語とは程遠い「国家語としての英語」が子ども与えられている。国家主義的な統制があまりに強力である。また外国語と謳いながら、複

数の外国語をそこに設定せず、明治初期以来英語のみに限定している。

猪口孝(2008)が「一人ひとりの個性的な発展を尊びながら教育がなされるべきところが、実際はマス教育で、ある程度の教育水準をもつ労働力の大量供給の仕組みとしての色彩がまだ強い。若者の人口が減少しているからといって、クラスの規模を四〇名から一〇名にするのではなく、学校の統廃合に向かっていることがその実態を端的に示している」と述べているが、長年にわたって「均一的な知識」を強制的に与え、その量を的確に理解しているかどうかで、生徒を選別するシステムが全国規模で罷り通っている。

これに対して、生徒の人間を経由して、そのあり方を大きく耕作する仕方としては次の方法があろう。例えば、年度毎に生徒が学習することを求められる知識の量が 10 であるとすれば、まずはそれらを暗記の対象として扱うことを止めることである。その代わりに、生徒 1 人 1 人が、社会や人間のつくり方というようなテーマの下に、その 10 の知識でもいいし、10 よりも少ない知識でもいいし、またはそれ以上の自分で集めた知識を含めてもいいが、それらを自分なりに操作して、相手に説明したり、納得させたりすることを基本として、その理解の程度を見る教育に変えていくことであろう。

B 選別主義からの自由

これまで、中央官庁の官僚を頂点に置いた形での、知的な能力の高いエリートを選別する選別主義が広く幅を利かせ、それが学校においても当然視されている。これが見直されないままに推移して、選別主義による犠牲者、人間的に破壊された生徒が続出している。

また、1808 年に英艦フェートン号が長崎港に侵入したことが切っ掛けで、蘭通詞が英語の学習を始めることになったことから、2008 年は英語教育 200 年と言われる。

しかし特に明治中期以降では、国家主義的な管理を一元的に受けて、実施されてきた学習という色合いが余りに強烈である。それだけではなく、選別英語と受験英語による無数の挫折者を出しながら、その事実がしっかり把握されず、それに関わる改革が望めない現実にもある。このことなどを考えれば、今日までどの程度英語学習ではなく、英語教育がなされたかについては疑問が残るばかりである。今後それについて検証する必要があるだろう。

III 改善提案

A 国家意識に基づいた国語教育ではなく、どんな他者をも対等な人間として見出す日本語教育を第一に教える。それを小学校 1 年生から実施する。これまで通り国語教育を継続したのは、海外の人たちを拒絶して建てられた厚く高い国語という壁を打ち壊したことはない。

B これとともに、教員養成や教室整備などを優先的に確保するという条件で、listening と speaking の習得を基本として、本来の英語教育につながり得るものを小学校 4 年生から実施する。その他の外国語については、教員養成、教材開発など条件整備を先に行い、当面 4 カ国語へと増やしていくものとする。生徒各々が選択するものである。

おわりに

目の前に誰がいても、その人への具体的な配慮を大切にする人間へと成長する機会を与えることが教育の基本であろう。それを可能にするのは、自らの内面において、相手を選ばない言葉を操作し、それで以て公正な判断ができる能力を身につけていることである。

訳読教授法では、和語に支えられているためとかく閉鎖的な背景に基づいて解釈されるという欠点がある。この観点を根本的に変えるべく、**listening** と **speaking** という作業に徹して己を最大限開放したところで、他者と対話することを起点に置いた **reading** であるべきことを本論で扱ってみた。

英語学習に関する資料

『英語教育論』（福原麟太郎）

一體結論としていへば、外国語教育といふのは所詮、人間の心の中から、國語教育だけでは、與えられない知見、引き出せない可能性を引き出し、日本の外にあるものをつかまへさせて、それで國家のお役に立たうといふのであります。(p.35)

「日本の大学における英語教育」『現代英語教育講座 1』（福原麟太郎）

恐らくどこの国でも、そのような特殊な英語を教えるのは学校ではなくて、その研究室あるいは職場であろう。しかも他面、そのような理工科学や技術を専門とする人々に不足しているであろう言語表現の美しさの鑑賞や人間性の文学的觀察を教え得るのは、英語教室においてであってこれは彼らに重要な精神的訓練をしていることになる。日本の英語教授が文学的に偏しているからとて、大して悲しむべきことでなく、その教師養成のむずかしさも、その意味では、かえって学生たちに幸いしていると言ってよいのである。(pp.11-12)

英語教育は高等学校課程において完成すべきであり、事実、道具としてあるいは研究基礎として運用される程度の英語は、現在の高等学校の英語教育が完全に行われうるならば、それだけで十分であると思う。口頭の英語のごときはおそらく高等学校一年程度の教科書の表現が身につけて居れば、大抵の用事に間に合うであろう。(p.14)

「日本人と英語」『現代英語教育講座 1』（中島文雄）

私は日本における話しことばの軽視、合理的思考の不足、民主主義や議会主義の未熟さが、いずれも関連があると考ええるものである。日本の英語教育が理論的には相当発達しているのに、十分な効果をあげていないのは、日本人がことばそのものを大切にしないことや、ことばの訓練ということに思い及ばないところに原因があるように思う。(pp.37-38)

以上が英語教育についての卑見である。私は教養英語と実用英語の区別を認めないものであり、基礎的な英語教育は英語の訓練を主とすべきものであると考える。そして英語教師は、英語の訓練を通して、日本文化の向上に寄与できるものと信じている。(p.38)

「英語教育の目的」『現代英語教育講座 1』（小川芳男）

英語教育はそれによってアングロ・サクソンの思考形式を習得することである。言語と思考とは不可分である。従って新しい言語を習得することは新しい思考形式を獲得することである。従来日本語を使用する社会の中で、日本的な思考の形式を身につけた人が、英語を学習することは、単眼を複眼にし、一次元の世界から二次元の世界へ出ることであり、閉じられた世界から開かれた世界の進出であり、心の革命である。

以上の意味において学校教育の中に占める英語科の比重は極めて重い。それによって単に外国の知識を得るばかりでなく外国を感じるからである。外国の知識の獲得ならば、かつて藤村作教授が言われたように翻訳によっても不可能ではない。しかしそれは単なる知識を集めることで真の理解とは程遠いものである。真の理解はその国の言語を通してでなくてはならない。そのことは逆に英語の学習自体が、たとえそれがいかに簡単なものでも、英語を話す国民を理解する第一歩を踏みだしているということである。(p.46)

「国際的貢献」『現代英語教育講座 1』（高橋源次）

およそ英語教育には、世界文化の摂取、それに対する貢献のほかに、日本文化に対する自覚、思考の訓練、人格の完成などの諸問題を含む人間教育、すなわち、英語による人間教育の大本がある。教育という以上、人間をつくることが究極の目的であるからである。今日は特に国際的視野をもつ人間像が求められている。世界の中の日本、日本の中の世界を認識する人物の輩出が希求されている。普遍性に立つ主体性の確立である。およそ文化は、地域的孤立が不可能である。国際的文脈において、国家を考え、国際的文脈において、文化意識を高揚したいものである。異なる言語をもちながら、今や人類は一つになろうとしている。その宿命的な人類の現実の中では、外国語教育は人間の責任であり、義務である。(p.71)

「わが国における英語教育の概観」(斎藤美洲)

「英語学修」の目的は実用にある。そしてその実用と言うのは、単に英語国民と文通したり、談話したりするような卑近な用務を言うのではなくて、習得した「英語を媒介として種々の知識感情を摂取することである。換言すれば、欧米の新鮮にして健全な思想の潮流を汲んで、わが国民の脳裏に注ぎ、二者相助けて一種の活動素を養う」ことである。

こういう実目的を果すためには、どういう方面に教育の主力を置くかということ、それは読書力の養成である。そして読書というのは、「他人の言語を耳で聴きながら了解する手順を、便宜上目をかりて行うのであるから」ちょうど聴くのと同じ手続きで、目で見るとそばから了解して行く「直読直解」が、その本来の姿である。

このためには、ただ文字さえ見ていればよいというのではなくて、第一に英語の正しい発音になれること、第二に会話、文法、作文の力がある程度確保されていなくてはならな

い。これを今、教授上の見地から言うと、ただ読書、作文、会話、文法とばらばらに教えることをせずに、それらの「主従強弱の関係を締め」、例えば最初の三年位までは、もっぱら話すこと、綴ること、書くことに力を用いて読書力の基礎を置き、上級にいたっては主として読むことに力を注ぎ、他はその補助にしようと言うような手心がなくてはいけない。

このようにして教授上の実用的方面の成績をあげるとともに、教師は、また教育上の価値についても充分心を注ぐべきである。発音、解釈、会話などという事柄を授けるに際しても、たんに形式上の修練のみを旨とせず、同時にその中に含まれている思想感情の方面にも注意をはらい、「外国人の心性を言語と言う外形を通じて、うかがい知ることをも得せしめ、その人情風俗のわが国との異同を覚え、いわゆる風物教授の実を挙げることも怠ってはならない。実用ということをあまり重んずると、了解、発表の形式のみに専心して、言語の中に宿されている「情致」を粗略にする傾向が生じやすい。これは語学教授がとかく偏狭に陥るものになるものである。(pp.23-24)

「学校英語について」『日本の英語』(福原麟太郎)

実用的に英語を十分活用したい人は、中学校や高等学校で習った英語の基礎の上に立って別に学習してほしい。中学がすんでからでもいい。高等学校がすんでからでもいい。大学の後でもよい。各学校の課程の中に特別な実用英語クラスを設けてもよい。徹底的にするなら、アメリカの軍部でこしらえたという強行日本語学校のように、志望学生をカン詰にする英語学校を作り、四六時中英語を話し書き読ませ、教師には英米人を多くして、何もかも英語的な空気の中に生活させて、厳格周到、一刻の無駄もなく英語学習に専心集中させれば、六ヵ月ないし一年の訓練で、英米社会の普通の人を相手に話し書き読み聞く能力を養うことは難しくないとは私は信じている。(pp.4-5)

みな、いわば、一般教養のためである。一般教養のために英語を学ぶのである。それは楽しく、ためになるものでなければならない。それは文化的な知識であり、芸能であり、人の心を豊富に培うものであるべきである。学校英語と実用英語とは自ずから異なる道を取る。受験英語も実用英語のうちである。だから受験英語学校が繁盛している。(p.6)

「語学哲学に基づく英語教育改善策」『日本人と英語』(斎藤兆史)

また、学校教育で与えるべきは、そのまま実用に供する低級な会話能力ではなく、学習者個々人がそれぞれの動機に基づいてのちのち必要な英語力を積み上げることができる堅固な基礎力である。そして、それは徹底した発音・文法・読解・作文訓練によってのみ築くことができる。そのような基礎力がそのままでは実地で使えないという当たり前の事実を問題視したところに、過去数十年にわたる日本の英語教育の誤りがあった。(p.219)

「日本の「英語教育」は、ここが間違っている」『日本人に一番合った英語学習法』

日本語と英語のはるかな距離 ①発音

日本語と英語のはるかな距離 ②文字と文法

日本語と英語のはるかな距離 ③機能

日本語と英語が違うのは、音や書記法や文法構造ばかりではない。私がもっとも重要な違いだと考えるのは、言語の機能、あるいは言語使用の理念の違いである。

第一章で見たとおり、イギリスの植民地政策によって世界的に広まり、多くの人が使用するようになった英語は、民族・文化的な違いによって誤解が生じないように、できるだけ言葉の論理性によって意味を伝達する言語となった。よく英語は論理的な言語だと言われるが、そうではない。そのような事情により、論理的に使わざるを得なくなったのだ。

(中略)

日本語と英語とが、かけ離れた言語である以上、西欧で開発された英語学習などを持ってきても、ほとんど日本人の役には立たない。日本人に一番合った学習法は、やはり日本人が開発したものでしかないのである。(pp.131-140)

「蘭学塾的英語教授法」(茂住實男)

その方法は、先ず文法を学び次いで翻訳にうつるという文法=訳読法であり、その階梯は、入門期の素読課程を経て翻訳・読解の学力を練磨する会読課程にむかうというものであった。いずれも当時の蘭学塾において定着していた方法であり階梯である。(p.195)

こうした状況下で行われていた開成所の英語教育は、綴字・発音、文法、訳読を教授する意図をもってはいても、また発音指導のできる教師のいないという客観的条件もさることながら、文法と訳読がその中心となるのは自然であった。調所から開成所と改められても、そこにおける目的は西洋学問を習得することであり、その目的達成のために外国語を学習するという、いわば西洋学問と外国語の関係は不変であったから、英語教育は文法=訳読法による、素読・会読課程を通して行われる英語の教授であった。(pp.227-228)

「訓読」とは何か(子安宣邦)

漢文訓読とは、仏教・儒教教典を主とした漢籍の受容過程でなされていった漢文解釈としての日本語化した読み、すなわち訓み(和訓)の方法として発達し、様式化されていった読法である。国語学者吉澤義則が成立期における訓読のあり方を、「平安期に於ける漢文の訓読は即ち今の解釈であり、講義である。我々は今日英語を学ぶに当って先ず音読する。次に解釈する。平安朝に於ける漢字は丁度それと同じ順序に於て行はれた筈である。先ず漢字を音読した。それから解釈した。解釈は申すまでもなく漢文を日本語に直すことである。かうして日本語に直されたものが訓読であつて、それを漢字の字傍に記入したものが訓点であつた。訓点は解釈であり、訓点は在る様式によって漢字の字傍に加へられた解釈であつた」と分かりやすく解説している。(p.72)

山田孝雄は日本の漢語漢文受容にあたって起こりうる事態は次の三つであったはずだと推理している。「漢語・漢文に国語が全然征服せらるべきか、或いは又またその漢語・漢文

をば全く国語が征服すべきか、若くは或る点は漢文のままにし、或る点は国語として取扱ひて二者妥協の途を開くべきかの三より外に存せざるべきものなるべし」。ここで漢字漢文受容をめぐる問題を山田が征服されるか、されないかといった国家間的な支配従属関係と見ていることに注目される。国語があくまで国家語であった山田にとって他言語受容は他国家による支配・他国籍者の侵入のメタファーをもって語られる。(p.77)

「英語教育の改革は?」(猪口孝)

ここで、なぜ英語教育について言及がないのかと不思議に思う方もおられるだろう。短く触れておくと、英語教育の改革は前述の全員向上脅迫シンドロームのただなかにあるために、百年河清を俟つにほぼ等しいからである。英語にかぎらず、義務教育の科目は全員が習得しなければならないのは、もちろん正しい。しかし、その教育方法に問題がありすぎる。

一人ひとりの個性的な発展を尊びながら教育がなされるべきところが、実際はマス教育で、ある程度の教育水準をもつ労働力の大量供給の仕組みとしての色彩がまだ強い。若者の人口が減少しているからといって、クラスの規模を四〇名から一〇名にするのではなく、学校の統廃合に向かっていることがその実態を端的に示している。これを逆光させるには、かなりの年月がかかるだろう。

それに英語の場合、当然英語を母国語ないし準母国語としている先生が望ましいのに、何でも国産という強迫観念から、英語教師もほとんどは国産である。全国の英語教師の半分(数万人)が英語を母国語ないし準母国語とする人で占められるようになるには、政府政策決定をみてからでも少なくとも一〇年はかかるだろう。

これら二つの構造的問題は、解決の糸口を見つけるのが容易でない。アメリカやイギリスの外交官は、たとえば任務についてからも専門的な教師のもとで毎日一〇時間ぐらいずつ半年から一年、集中的に研修を受けている。(pp.77-78)

参考文献

- [1] 猪口孝『英語は道具力』(西村書店、2008)
- [2] 子安宣邦『漢字論』(岩波書店、2003)
- [3] 斎藤美洲『英語教育概観』(岩崎書店、1951)
- [4] 斎藤兆史『日本人に一番合った英語学習法』(祥伝社、2003)
- [5] 斎藤兆史『日本人と英語』(研究社、2007)
- [6] 福原・岩崎・中島『現代英語教育講座1』(研究社出版、1964)
- [7] 福原麟太郎『英語教育論』(研究社、1948)
- [8] 福原麟太郎『日本の英語』(恒文社、1997)
- [9] 茂住實男『洋語教授法史研究』(学文社、1989)

ファイル名 : 16 【一般科 : 品川】 (山田) .doc

フォルダ : G:\20090219\11-16

テンプレート : C:\Documents and
Settings\1600.D1NV87BX\Application
Data\Microsoft\Templates\Normal.dot

表題 : 文法・訳読教授法と教養英語

副題 :

作成者 : SHUHO

キーワード :

説明 :

作成日時 : 2009/03/11 11:54:00

変更回数 : 2

最終保存日時 : 2009/03/11 11:54:00

最終保存者 : 山田 豪

編集時間 : 0 分

最終印刷日時 : 2009/03/12 8:54:00

最終印刷時のカウント

ページ数 : 13

単語数 : 2,428 (約)

文字数 : 13,841 (約)